学生相談機関のイメージ及び周知度と来談意思の関係

伊藤直樹 明治大学

The image and familiarity of student counseling service and willingness to use the service

Naoki Ito (Meiji University)

The purpose of this study was to investigate the relationship between image and familiarity that college students had about student counseling service and their willingness to make use of the service. A questionnaire was administered to 421 college students. Factor analysis of the image found two positive sides: helpfulness and support in crisis, and two negative ones: disadvantage and uneasiness. Men had an image that was higher on support in crisis and disadvantage than women. Women were more familiar with the service, but no sex difference was found in the willingness to visit it. First-year students were lower in terms of their familiarity, but no image differences were found among students of different years. Regression analysis of the willingness indicated that different predictors became significant, depending on the sex and year of the respondents. It was suggested that different information about counseling service should be disseminated, so as to maximize the willingness, depending on the sex and year of the students.

Key words: college students, student counseling service, image, familiarity, willingness.

The Japanese Journal of Psychology

2006, Vol. 76, No. 6, pp. 540-546

最近、大学生の不適応が急増し、それと並行するように、大学内の学生相談機関の利用者も増加傾向にあると言われる（文部省高等教育局・大学における学生生活の充実に関する調査研究会，2000）。アメリカの学生相談機関への学生の来談率については、10—30%と報告したものが多い（Clary & Frisstad, 1987; 森，1990）。一方、日本学生相談学会特別委員会（2001）の2000年度の調査によれば、日本では大学で来談率が2.8%，短期大学で5.5%であり、最近の利用者の増加傾向にもかかわらず、全体としては依然として来談率が低い状況であると言える。学生の来談率が高まれば、不適応状態に陥った学生に適切な援助が行われる可能性も高まると考えられる。

学生の来談行動について、高野・宇留田（2002）は、学生の“援助要請行動”としてモデル化し、学生が援助要請行動を取る際の負担として、設備面でのアクセスのしやすさなどの“経済的・物質的コスト”と、援助を要請すること自体に付随する心理面での負担（“心理的コスト”）を挙げている。そして、学生の来談には“心理的コストを下げるために、相談機関に

対するイメージを改善すること”が重要であることを指摘している。

アメリカでは、この領域に関しては、相談することに対する“認知”（perception），“期待”（expectation），“態度”（attitude）などの視点から研究が行われている。

“認知”という視点からは、“学生相談機関で相談するのに適切な問題”に対する認知についての研究があり、教職員、一般学生、来談学生における相談への適切性の認知の差異が有効な利用を妨げていることが指摘されている（Sanders & Sanders, 1985）。また、個人や小集団を志向したオリエンテーションが適応問題を相談することへの適切性の認知を高め、利用可能性を高めるという指摘もある（Miles & McDavis, 1982）。

“期待”という視点からは、カウンセリング期待尺度（The Expectation About Counseling Scale：以下EACとする；Tinsley, Workman, & Kass, 1980）を用いた研究が挙げられる。EACを用いた研究には、性別、学生が抱えている問題の有無、人種の差異によるカウンセリングへの期待の差異について明らかにしようとしたものが多く、Kemp（1994）は、マイノリティの学生の来談の促進のためには彼らを取り巻く大学内の諸環境を改善することが重要であることを指摘している。

“態度”という視点からは、Fischer & Turner (1970)の作成した“専門的心理的援助への態度尺度”(The Attitudes Toward Seeking Professional Psychological Help Scale:以下ATSPPHとする)を用いた援助要請行動に関する一連の研究があり、日本でも水野・石隈(1999)によって紹介されている。Komiya, Good, & Sherrod (2000)はATSPPHを用いた研究により、自己開示性を高めることが心理的援助を受けることへの偏見を低減し、来談を促進すると指摘している。

一方、日本ではこの点に関して、SD法や自由記述式の質問紙を用いて学生相談機関のイメージという視点から行われる研究が多い(荻原・吉川・山田, 1995; 真覚・中村, 1993; 櫻井・有田, 1994)。しかし、これらの研究はイメージの分類の妥当性について問題が残し、また、学生相談機関のイメージと来談との関係について直接的な示唆を与えるものではない。

これに対し、森田(1997)は学生相談室に来談した学生を対象にした研究から、学生の持つイメージにより来談、相談の継続性、相談内容などに違いが見られたと報告しているが、実験参加者が少ないこと、来談しない学生も含めた検討が必要であることなどの課題が残されている。来談しない学生も含めた研究としては、西河・鈴木(1994)が学生相談室の利用希望ありの学生のイメージは全般的によく、それが1年後も継続していたと報告している。

これらの研究からも学生相談機関のイメージが学生の来談行動に影響を与えることが推測されるが、両者の関係について、より具体的に分析した研究は見られない。

ところで、学生の来談を考える際には、学生相談機関についての情報をどの程度得ているか、すなわち、周知度も重要な要因の一つであると言えよう。周知度に関しては、アメリカではJohnson, Nelson, & Wooden (1985)などの研究があるが、来談との関連を探究したものは見られない。これに対し、伊藤(2002)は学生の周知度と実際の来談者数に関連があることを指摘している。学生相談機関の周知度が高まることは、学生が問題を抱えた際に、学生相談機関を訪れるまでに必要となる負担を減少させ、結果として、来談の促進につながることが予想される。

以上、先行研究を概観すると、アメリカの研究では、学生相談機関自体に対するイメージを扱っていないこと、日本の研究では、イメージの分類を実証的に確認したものや周知度を扱ったものが少なく、また、来談意思との関連を扱ったものが少ないという問題点が挙げられる。

そこで、本研究では、上述のような先行研究の知見や問題点を踏まえ、まず、学生が学生相談機関に対して実際に持っているイメージを測定する質問紙を作成

し、それを用いた調査から学生相談機関イメージの分類を行う。さらに、学生相談機関のイメージ及び周知度と来談意思の関係について示唆を得ることを目的とする。

方 法

予備調査 2001年11月に大学1-3年生46人(男子33人、女子13人)を対象にして学生相談機関に対するイメージをたずねる自由記述式の質問紙を実施し、学生の学生相談機関へのイメージに関する表現を収集した。

質問紙の作成 櫻井・有田(1994)、西河・鈴木(1994)、荻原他(1995)、森田(1997)及び予備調査の回答の中から、学生相談機関のイメージについての記述235個を抽出した。次に、KJ法を用いて項目の整理を行い、学生相談機関イメージ項目(55項目)を選定した。

周知度については、Kahn, Wood, & Wiesen(1999)を参考にして、学生相談機関の“存在”、“場所”、“開室日時”についてたずねる項目(3項目)を作成した。

来談意思については、下山・峰松・保坂・松原・林・齋藤(1991)における分類を参考に、現在及び将来に悩みや不安を抱えた時、学生相談機関を利用したい程度をたずねる項目(2項目)と、“学業”、“進路”、“就職”、“性格”、“対人関係”、“家庭”、“経済”、“精神衛生”に関する不安や悩みの種類別に利用したい程度をたずねる項目(8項目)の合計10項目を作成した。なお、ここでいう来談意思とは、自分が悩みや不安を抱えた場合に学生相談室を利用するか否かについての予測であり、実際の来談行動を推測するための指標である(Blier, Atkinson, & Geer, 1987)。

これらを合わせた68項目からなる質問紙を本調査に用いた。なお、学生相談機関イメージと不安や悩み別の来談意思は5件法により、現在及び将来の来談意思と周知度は4件法により回答を求めた。

本調査 本調査は2001年12月-2002年1月に3大学の1-4年生349人を対象に、授業時に一斉に実施するか手渡し式で実施した。3、4年生の実験参加者が少なかったため、2004年7月にさらに1大学の3、4年生146人を対象に調査を実施した。すべての項目に回答した421人(1年生221人、2年生42人、3年生77人、4年生81人、男子202人、女子219人)を分析の対象とした。

結 果

学生相談機関イメージの構造の分析 学生相談機関イメージ項目55項目のうち、項目間の相関が $r>.7$ 以上のペアの片方及び分布に偏りが見られた2項目を除外した。残りの53項目について固有値1を基準に

Table 1
学生相談機関イメージ項目の因子分析結果（バリマックス回転後）

項 目	F1	F2	F3	F4
21. 学生にとってありがたいところ	.770	-.057	-.018	-.070
28. 役に立つところ	.747	-.099	-.117	-.099
9. 学生にとって心強いところ	.732	-.080	-.055	-.138
2. 頼りになるところ	.702	-.018	-.166	-.171
22. 信頼できるところ	.675	.022	-.286	-.132
36. 便利なところ	.636	-.087	.158	-.164
46. 適切なアドバイスを与えてくれるところ	.610	.055	-.230	-.038
5. 学生のために良いことをしているところ	.608	-.009	-.090	-.024
43. 学生のためにがんばっているところ	.596	.103	-.160	-.087
3. 学生のことを真剣に考えてくれるところ	.589	.055	-.281	-.077
14. 学生生活に必要なところ	.565	-.083	.044	-.114
41. 悩みを解決してくれるところ	.560	.132	-.148	-.021
32. やさしい先生がいるところ	.501	.229	-.124	-.244
1. 専門家として相談にのってくれるところ	.456	.072	-.268	-.062
52. 追いつめられている人が行くところ	-.026	.739	.018	.166
12. 自分で悩みを解決できない人が行くところ	.001	.680	.123	-.104
27. 絶望した人が行くところ	.019	.674	.114	.106
7. ひどく悩んでいる人が行くところ	.017	.636	-.151	.099
40. 精神的に弱い人が行くところ	-.117	.634	.268	.052
35. いじめにあっている人が行くところ	.048	.618	.233	.082
25. どうしようもなくなったら行くところ	.026	.587	-.083	.278
17. 人に言えない悩みがある人が行くところ	.196	.584	-.238	.135
6. 相談相手がいない人が行くところ	-.161	.574	.234	-.009
51. 自分のことを決められない人が行くところ	-.189	.534	.282	-.054
29. 神経質な人が行くところ	-.083	.512	.326	.024
13. 不安なことがある人が行くところ	.274	.483	-.091	.090
10. 何かトラブルがあった人が行くところ	.185	.428	.068	.155
48. お説教されるところ	-.161	.049	.636	.167
37. 相談すると不利益がありそうなところ	-.173	.117	.601	.139
19. 甘えている人が行くところ	-.149	.249	.530	-.011
15. 相談したことが外部にもれそうなところ	-.071	.087	.433	.039
31. 事務的・機械的な対応をするところ	-.190	.047	.416	.250
18. 近寄りやすいところ	-.214	.154	.127	.636
54. 相談に行きにくいところ	-.267	.285	.151	.582
33. できれば行きたくないところ	-.236	.306	.163	.505
34. 何をしているかよくわからないところ	-.287	.092	.158	.471
各因子によって説明される分散	6.184	5.050	2.421	1.730

因子分析（主因子解，バリマックス回転）を行い，比較的解釈しやすい4因子を得た（Table 1）。因子負荷の高い項目から第1因子を“有益イメージ”因子，第2因子を“危機支援イメージ”因子，第3因子を“不利益イメージ”因子，第4因子を“不気味イメージ”因子と解釈した。

学生相談機関イメージ尺度の作成 各因子への因子負荷が.40以上の項目により尺度構成を行い，実験参

加者ごとに各項目の粗点の和を項目数で除した得点により学生相談機関イメージ得点を算出した。これら4尺度について Cronbach の α 係数及び尺度間相関を求めたところ“不利益イメージ”で若干値が低かったが，おおむね内の一貫性には問題がないと思われた（Table 2）。

周知度得点及び来談意思得点の算出 周知度については3項目の粗点の和を周知度得点とした。また，来

Table 2
学生相談機関イメージ・周知度・来談意思尺度間の相関

	平均	SD	α 係数	有益	危機支援	不利益	不気味	周知度
有 益	3.314	.639	.907	—	—	—	—	—
危機支援	3.012	.699	.879	-.005	—	—	—	—
不利益	2.230	.645	.696	-.364**	.266**	—	—	—
不気味	3.365	.830	.766	-.436**	.355**	.373**	—	—
周知度	6.202	2.560	.840	.111*	-.035	-.120**	-.170**	—
来談意思	27.786	7.204	.833	.471**	.068	-.167**	-.302**	.164**

* $p < .05$, ** $p < .01$.Table 3
学生相談機関イメージ・周知度・来談意思の性差・学年差

	性 別		学 年	
	男子	女子	1 年生	2—4 年生
有 益	3.278 (.687)	3.348 (.591)	3.278 (.636)	3.355 (.641)
危機支援	3.086 (.764)	2.943 (.628)	3.017 (.670)	3.005 (.732)
不利益	2.351 (.711)	2.118 (.557)	2.278 (.699)	2.176 (.576)
不気味	3.365 (.856)	3.364 (.807)	3.372 (.837)	3.356 (.824)
周知度	5.792 (2.629)	6.580 (2.440)	5.891 (2.542)	6.545 (2.542)
来談意思	27.594 (7.758)	27.964 (6.666)	28.019 (6.592)	27.529 (7.834)

Table 4
来談意思を目的変数とした回帰分析

予測変数 (β 値)		R^2	F 値
全 体	有益 ($\beta = .390$), 危機支援 ($\beta = .131$), 周知度 ($\beta = .098$), 不気味 ($\beta = -.162$)	.257	36.041**
1 年男子	有益 ($\beta = .513$)	.263	37.417**
1 年女子	有益 ($\beta = .317$), 周知度 ($\beta = .207$)	.170	11.648**
2—4 年男子	有益 ($\beta = .509$), 周知度 ($\beta = .203$)	.304	20.766**
2—4 年女子	不気味 ($\beta = -.540$), 危機支援 ($\beta = .305$), 不利益 ($\beta = -.198$)	.362	18.519**

** $p < .01$

談意思に関しては、4 件法で回答させた項目の粗点を 5/4 倍し、5 件法の得点のレンジと合わせた得点と、内容別の来談意思の粗点を加えた得点を来談意思得点とした。両尺度の α 係数は Table 2 に示す通りであり、いずれも内の一貫性には問題がないと思われた。

学生相談機関イメージ及び周知度と来談意思の関係
学生相談機関イメージと来談意思の相関を求めたところ、Table 2 下段のようになった。“有益イメージ”は来談意思 ($r = .471$, $p < .01$) との間に有意な正の相関が見られた。これに対し“不利益イメージ”及び“不気味イメージ”は来談意思との間にそれぞれ $r = -.167$ ($p < .01$), $r = -.302$ ($p < .01$) の有意な負の相関が見られた。周知度と来談意思の相関を見たところ、 $r = .164$ ($p < .01$) の有意な正の相関が見られた。

性差・学年差の分析 学生相談機関イメージ、周知

度及び来談意思の性差・学年差を検討するために性別×学年の 2 要因の分散分析を行った。学年差については学年間の人数差を考慮し、1 年生と 2—4 年生の 2 群に分け分析した。その結果、“危機支援” ($F(1, 417) = 4.411$, $p < .05$), “不利益” ($F(1, 417) = 13.784$, $p < .01$) で男子が女子より有意に得点が高く、周知度は女子が男子より有意に得点が高かった ($F(1, 417) = 11.034$, $p < .01$)。また、学年差については周知度のみ 2—4 年生が 1 年生より有意に得点が高かった ($F(1, 417) = 7.189$, $p < .01$)。なお、いずれも交互作用は見られなかった (Table 3)。

来談意思の予測 来談意思に影響を及ぼす要因をさらに探るために、学生相談室イメージ及び周知度を予測変数、来談意思を目的変数としてステップワイズ方式の回帰分析を行った。学生相談機関イメージ及び周

知度にいくつかの性差, 学年差が見られたことから, 全体の分析に加え, 1 年生男子, 1 年生女子, 2-4 年生男子, 2-4 年生女子の 4 群に分けて分析を行い, 各群で最も説明率の高いモデルを採択した (Table 4)。統計的に有意であった予測変数の回帰係数は, 全体で“有益”が $\beta = .390$, “危機支援”が $\beta = .131$, 周知度が $\beta = .098$, “不気味”が $\beta = -.162$, 1 年生男子で“有益”が $\beta = .513$, 1 年生女子で“有益”が $\beta = .317$, 周知度が $\beta = .207$, 2-4 年生男子で“有益”が $\beta = .509$, 周知度が $\beta = .203$, 2-4 年生女子で“不気味”が $\beta = -.540$, “危機支援”が $\beta = .305$, “不利益”が $\beta = -.198$ であった。

考 察

学生相談機関イメージの分類及び周知度と来談意思の関係 本研究の学生相談機関イメージの 4 因子は, 大きく分けると, どちらかと言えば肯定的なイメージを表す 2 因子 (“有益”, “危機支援”) とどちらかと言えば否定的なイメージを表す 2 因子 (“不利益”, “不気味”) に分かれるように思われる。また, 肯定的イメージであっても“危機支援”は来談意思への相関及び回帰係数が“有益”に比べて小さく, 否定的イメージであっても“不気味”は“不利益”に比べ, 相対的に来談意思への相関及び回帰係数が負の方向に大きかった。すなわち, 学生相談機関のイメージには肯定的・否定的イメージのいずれでも, 来談に比較的影響の大きいイメージとそうでないイメージがあると考えられる。

“有益”と“危機支援”に因子負荷の高い項目から考えると, 両イメージの差違に学生が抱える問題の深刻度があると思われる。Kushner & Sher (1989) は大学生を対象にした調査から, 苦痛が高まると潜在的な治療への恐怖が活性化され, 回避的な動機づけが高まることを指摘しているが, “危機支援”は“有益”に比べ, 苦痛が高まった状態のイメージであり, このことが来談意思を低下させると考えられる。また, “不利益”と“不気味”の差違は学生相談機関の対応に関して学生が持っている予備知識の差違によると思われる。すなわち, “不利益”では学生相談機関の実際の対応がかなり誤って理解されていることが推測され, 一方の“不気味”では学生相談機関の実際の対応に関する予備知識がないことが過剰な不安を喚起し, 来談意思を低下させることが推測される。

従来, 本研究のようにイメージを区別してとらえる研究は見られず, また, 真覚・中村 (1993), 荻原他 (1995), 森田 (1997) の分類と比較しても, 本研究の因子はより具体的に整理された分類となっていると言える。本研究の 4 イメージは, 今後, 学生相談機関へのイメージと来談意思の関連を探る際に有益な視点となると考えられる。

また, 森田 (1997) における相談室に来談した“敬遠群”の学生 2 名は, 本研究では“不気味イメージ”の強い学生に相当すると思われるが, 本研究では来談していない学生も含めて, 学生相談機関に対する漠然とした恐怖感を持つ学生は来談に結びつきにくいことが確認された。

周知度と来談意思の相関は小さかったが, 周知度が高い学生ほど来談意思を高く見積もっている傾向があることが示唆された。これは周知度が高くなることにより, 相談する際の心理的な負担が減少して, 来談しやすくなるという仮説を裏付けるものである。

性差・学年差について 性差について検討したところ, “危機支援”, “不利益”で男子の得点が有意に高く, 周知度は女子の得点が有意に高かった。アメリカの研究では, 男子学生は女子学生より専門的援助を利用することへの志向性が低いことを示す研究が多いが (例えば, Lopez, Melendez, Sauer, Berger, & Wyssman, 1998), 今回の調査では, 来談意思に性差は見られず, “危機支援”や“不利益”のみに性差が見られた。日本の男子学生は学生相談機関に対する知識が不足し, “危機支援”や“不利益”のように学生相談機関に対して限定されたイメージや実際とはやや異なるイメージを持ちやすいが, そのことは専門的援助への志向性には大きな影響を及ぼしていないとも考えられる。これらの点で日米に差異があることが示唆された。

学年差では, 2-4 年生の方が 1 年生より周知度が高かったが, これは在学期間が長くなるために, 学生相談機関の情報に触れる機会が多くなることによるものと思われる。一方, 従来, 在学期間によるイメージの変化については詳しい検討はなかったが, 本研究の結果から学生相談機関イメージは学年差が見られず, 在学期間の影響を受けにくいと考えられた。これは入学時のイメージが卒業まで保持される可能性を意味し, 新入生へのオリエンテーションや 2-4 年生への継続的な広報活動の重要性を示唆するものである。

性別・学年別に行った回帰分析の結果から, 1 年生男子・1 年生女子及び 2-4 年生男子では来談意思は“有益イメージ”に依存する面が大きいことが示唆された。したがって, これらの学生の来談については“有益イメージ”を強化し, 問題が重篤になる前に来談するように働きかけることが効果的であると考えられる。また, 1 年生女子及び 2-4 年生男子では来談意思は周知度にもある程度依存している。入学時に限らず, 様々な機会に学生相談機関の基本的な情報を伝えることは, これらの学生の来談に効果を上げることが期待できよう。

これに対し, 2-4 年生女子はかなり傾向が異なっており, “不気味イメージ”と“不利益イメージ”を払拭する働きかけと“危機支援イメージ”を高める働きかけが重要であると考えられる。具体的には, 大学

の学生相談機関における対応をわかりやすく伝えることや、利用者に決して不利益を及ぼさないこと、問題が重篤になっても利用できる場であること等をアピールするような工夫をすることが最も効果的であると考えられる。

学生相談機関は全学生に対して同じような広報活動を行うだけではなく、上記のような学年・性別ごとの特徴をよく把握した上で広報活動を行うことが必要となろう。

今後の課題 本研究では実験参加者数の関係から調査を2回実施したが、調査時期の違いにより学生相談機関の活動に変化がある可能性もあり、十分な人数の実験参加者を対象とした1回の調査で結果を確認する必要がある。また、学生相談機関の全体的なイメージを明らかにすることを主たる目的としたため、大学による学生相談機関の活動、利用条件などの差違については検討しなかった。こうした差違が学生の来談に及ぼす影響についても検討する必要がある。さらに、イメージの継続的な変化と来談意思との関係、学生相談機関へのイメージが形成される過程やイメージを変容させる方法、来談した学生と来談しようと思ったが実際には来談しなかった学生の差違などについての実践的な研究も必要となろう。

引用文献

- Blier, M. J., Atkinson, D. R., & Geer, C. A. (1987). Effect of client gender and counselor gender and sex roles on willingness to see the counselor. *Journal of Counseling Psychology*, **34**, 27-30.
- Clary, E. G., & Fristad, M. A. (1987). Predictors of psychological help seeking on a college campus. *Journal of College Student Personnel*, **28**, 180-181.
- Fischer, E. H., & Turner, J. I. (1970). Orientation in seeking help: Development and research utility of an attitude scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **35**, 79-90.
- 伊藤直樹 (2002). ある大学における学生相談機関の開設初期の活動——学生相談室再開室から2年半の活動を振り返って—— 学生相談研究, **23**, 185-195.
- (Ito, N. (2002). A case report about activities of a college counseling organization in the early stage in a private college: Review of activities in two years and a half after reopening. *Japanese Journal of Student Counseling*, **23**, 185-195.)
- Johnson, D. H., Nelson, S. E., & Wooden, D. J. (1985). Faculty and student knowledge of university counseling center services. *Journal of College Student Personnel*, **26**, 27-32.
- Kahn, J. S., Wood, A., & Wiesen, F. E. (1999). Student perceptions of college counseling center services: Programming and marketing for a seamless learning environment. *Journal of College Student Psychotherapy*, **14**, 69-80.
- Kemp, A. D. (1994). African-American students' expectations about counseling: A comparative investigation. *Journal of Multicultural Counseling and Development*, **22**, 257-264.
- Komiya, N., Good, G. E., & Sherrod, N. B. (2000). Emotional openness as a predictor of college students' attitudes toward seeking psychological help. *Journal of Counseling Psychology*, **47**, 138-143.
- Kushner, M. G., & Sher, K. J. (1989). Fear of psychological treatment and its relation to mental health service avoidance. *Journal of Professional Psychology: Research and Practice*, **20**, 251-257.
- Lopez, F. G., Melendez, M. C., Sauer, E. M., Berger, E., & Wyssman, J. (1998). Internal working models, self-reported problems, and help-seeking attitudes among college students. *Journal of Counseling Psychology*, **45**, 79-83.
- 真覚 健・中村雅知 (1993). 学生の相談相手と相談機関のイメージについての調査 東北大学学生相談所紀要, **20**, 11-22.
- (Masame, K., & Nakamura, M. (1993). Survey on selection of adviser and impressions for counseling institutions. *Bulletin of Student Counselors' Office of Tohoku University*, **20**, 11-22.)
- Miles, G. B., & McDavis, R. J. (1982). Effects of four orientation approaches on disadvantaged black freshmen students' attitudes toward the counseling center. *Journal of College Student Personnel*, **23**, 413-418.
- 水野治久・石隈利紀 (1999). 被援助志向性、被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, **47**, 530-539.
- (Mizuno, H., & Ishikuma, T. (1999). Help-seeking preferences and help-seeking behaviors: An overview of studies. *Journal of Educational Psychology*, **47**, 530-539.)
- 文部省高等教育局・大学における学生生活の充実に関する調査研究会 (2000). 大学における学生生活の充実方策について (報告)——学生の立場に立った大学づくりを目指して—— 文部省
- 森 裕子 (1990). アメリカにおける学生相談 (コロラド州立大学の場合)——その2, 活動内容・日本の学生相談への示唆—— 学生相談研究, **11**, 18-31.
- (Mori, H. (1990). College counseling in the United States particularly at Colorado State University: Part 2. Services and programs. *Student Counseling Journal*, **11**, 18-31.)
- 森田美弥子 (1997). 学生相談室イメージと来談の関係——大学生を対象にして—— 心理臨床学研究, **15**, 406-415.
- (Morita, M. (1997). The relationship between the image of the counseling center and the counseling process for university students. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **15**, 406-415.)
- 日本学生相談学会特別委員会 (2001). 2000年度学生

- 相談機関に関する調査報告 学生相談研究, **22**, 176-211.
 (Special Committee of the Japanese Association of Student Counseling (2001). A report on the survey about student counseling institutions in 2000. *Student Counseling Journal*, **22**, 176-211.)
- 西河正行・鈴木典子 (1994). 学生は学生相談室をどのように見ているか?——短期大学と専門学校の学生相談室調査を通して—— 慶應義塾大学学生相談室紀要, **22/23**, 63-76.
 (Nishikawa, M., & Suzuki, N.)
- 荻原公世・吉川政夫・山田 實 (1995). 学生相談のイメージとあり方——学生相談室に関する調査・中間報告—— 東海大学学生相談室報告, **28**, 120-129.
 (Ogihara, K., Kikkawa, M., & Yamada, M.)
- 櫻井信也・有田モト子 (1994). SD 法による学生相談センターに関するイメージの測定 学生相談研究, **15**, 10-17.
 (Sakurai, S., & Arita, M. (1994). An image of student counseling center measured by semantic differential method. *Student Counseling Journal*, **15**, 10-17.)
- Sanders, J., & Sanders, R. C. (1985). Faculty members' and students' perceptions of services provided by their counseling center. *College Student Journal*, **19**, 384-388.
- 下山晴彦・峰松 修・保坂 亨・松原達哉・林 昭仁・齋藤憲司 (1991). 学生相談における心理臨床モデルの研究——学生相談の活動分類を媒介として—— 心理臨床学研究, **9**, 55-69.
 (Shimoyama, H., Minematu, O., Hosaka, T., Matsubara, T., Hayashi, S., & Saitoh, K. (1991). A study on clinical model in the field of student counseling. In terms of classification of the student counseling activities. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **9**, 55-69.)
- 高野 明・宇留田 麗 (2002). 援助要請行動から見たサービスとしての学生相談 教育心理学研究, **50**, 113-125.
 (Takano, A., & Uruta, U. (2002). Student counseling as a service: From the point of view of help-seeking behavior. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **50**, 113-125.)
- Tinsley, H. E. A., Workman, K. R., & Kass, R. A. (1980). Factor analysis of the domain of client expectancies about counseling. *Journal of Counseling Psychology*, **27**, 561-570.

——2003. 11. 10 受稿, 2005. 9. 3 受理——